

# 模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月25日)

授業者：〇〇

範囲：地球温暖化問題

## 主な感想・代案

- 生徒との対話の瞬発力というのでしょうか、即興的な反応もうまくできており、教師役が話す場面がやや多めだったものの、それほど気にならないようなスムーズさがありました。また、即興的に答える内容からも教材研究をしていることが伝わってくる場面もありました。
  - 板書計画や用意してきた資料なども、準備されていることがよく分かりました。
  - その上で私が思うのは、この授業は「社会科」というより「総合的な学習の時間」のような性格が強かったのではないかと。という点です。「社会科らしさ」とはなかなか定義しにくいですが、社会事象に関する背景や原理、因果関係などを理解した上で、自分の問題として捉えるようなことだと仮にしましょう。そうした場合、〇〇さんの授業では、「世界の問題」「身近な問題」の両方を関連付けて捉えさせようとしていたのは良かったと思うのですが、地球温暖化が起きている社会的な原因、社会構造上の問題点などについては触れることが少なく、論点は自分には何ができるか？という点に集中していったように感じました。喩えて言えば、私たちがエコバッグを使うよりも、世界的なインパクトのあるNGOや組織(例えば、climate action networkとか地球環境基金とか)に寄付した方が、社会的に影響があるかもしれない。でも、その組織がインパクトがなぜあるのか？と考えたら、世界規模での問題を考えざるを得ない。そういった視点がもう少し欲しいような気がしました。(もちろんエコバッグを使うことは大切だし、リサイクルをすることも大切です)。地球環境問題は総合の授業でも扱えると思うのですが、それを社会で扱う意義というのは、国際政治やこれまでの歴史などを踏まえて、その問題を複数の面からとらえることのように思います。
- 仮に私ならば、主発問は、「地球温暖化を解決するの必要なのは、国の政策か？草の根の活動か？」とします。表現が少し難しければかみ砕きます。結論としては両方必要なのですが、環境問題に取り組んできた様々な市民団体の活動や市民の生活の変化(エコバッグなどの自主的な利用)などもあり、他方で国家レベルでの政策も進みつつあるという話をしていきます。そうした両極の活動がある中で、「生徒に自分にできることは何か？それがなぜ効果的と言えるのか？」を答えさせます。

## 【コラム】理論と実践の接点

社会科教育は「社会認識の形成を通して、市民的資質を育成する」教科と言われたりします。ここで重要なのは、社会に関する深い認識を鍛える「社会認識の形成」と、社会の構成員(市民)としての資質や態度を育てるような「市民的資質の育成」の両方が必要とされている点です。この社会認識の形成には、皆さんが大学で学んでいる社会諸科学や人文科学などの成果が大いに利用できますし、そういった社会科学の目から社会を読み解けるようになることが期待されています。

例えばボランティアを例にとると、地域のごみ拾い活動の価値を生徒に強調し、その活動を促すだけの授業では、「社会認識の形成」としては不十分ということになります。社会の構造上の問題などを見極めつつ、一方で生徒自身に何ができるかを考えさせる。社会科にはその両方の役割が必要となります。ただ、これがなかなか難しく、多くの社会科教育関係者の往年の悩みでもあります。

〇〇さんの授業で言うと、この授業は「社会認識の形成」の側面が弱かったように感じます。なぜ地球環境問題は解決しないのか？なぜここまで深刻化してしまったのか？こういった問いに答えるためには、おそらく身近な問いだけではなく、皆さんが大学で学んでいるような社会科学の知識のエッセンスが必要になると思います。

【参考文献】草原和博(2012)「社会認識と市民的資質」社会認識教育学会編『新 社会科教育学ハンドブック』明治図書。